

祖父定助の商売と息子達（我はいかにして途上国学徒となりしか 第一二話）

著者	塩田 光喜
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	216
ページ	37-37
発行年	2013-09
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00003634

我はいかにして 途上国学徒となりしか

塩田 光喜

● 第一二話 祖父定助の商売と息子達

朝鮮半島の唐辛子^{とうからし}を大量に買い付けて、大阪の市場で売るといふのは、言うは易くして行ふは難い事業である。当時の朝鮮半島は日本統治下にあったから、日本語で買い付けはできたらうが、実際に買い付けネットワークを創り上げるのは至難^{しなん}の業である。そして、相場^{うかが}を窺いながら、機を見て船の手配をし、荷積みをして対馬海峡を渡り、瀬戸内海を突っ切つて、大阪の港に乗り入れる。そうして、大阪の干物問屋と値の交渉をして売却する。うまくゆけば、儲け^{もうけ}は莫大だが、下手をすれば大損を蒙^{もう}る。一回一回が大博打のような商売だ。

しかも、祖父定助は、その一切を一人で仕切つたのだ。塩田定助個人商店には番頭^{ばんとう}も手代^{てだい}もいなかった。

しかし、祖父の事業は軌道に乗つていった。

その間、稔^{みのる}、晋三^{しんぞう}、良作^{りょうさく}と男の子がたて続けに生まれ、塩田家の未来は前途洋々たるものがあつた。

定助は子供達を愛した。商売の一サイクルを終えると、詫間^{たつま}に戻り、その間は毎晩息子達を一人一人、風呂場で自らの手で体を洗つてやるのを常とした。

とはいえ、自分の子とはいえ、お気に入りというものはあるものだ。

祖父定助の一番のお気に入りには次男の俊輔叔父だ。何せ、明るく快活だ。一緒に汽車に乗つても、歌を口ずさんだり、かと思えば、「お父さん、お父さん、お父さん」と言つてにぎやかに話しかけてくる。祖父は行く行くはこの子の後継ぎにと考えていたようだ。

それに比べると、父正は祖父の受けはあまり芳しくなかつたようだ。学校の勉強は抜群（とりわけ、算数は得

意中の得意だ）にできたが、何しろ内向的な子で、何か辛いこと、悲しいことがあつてもシクシク泣いているばかり。祖母が「どしたんな。何があつたんな？」と聞いても、心に秘めていつかなしやべろうとしない。だが、人の世はうまくできたもので、このメソ助が曾祖母コヲにはカワイくてならない。曾祖母コヲが、孫の中で一番愛してやまなかつたのが、父正だ。そして後に、父に対する曾祖母コヲの寵愛^{ちようあい}のおこぼれに私も与^{あずか}ることになる。



我が一族の菩提寺吉祥院。仁尾の真言六寺院の1つである